第2篇　貨幣の資本への転化

第4章　貨幣の資本への転化

第1節　資本の一般的定式

〔浜林正夫「資本論」を読む〕

マルクスの二つの発見により、社会主義は空想から科学になった。❶史的唯物論、❷剰余価値である。

（利潤はどこで生ずるか）

資本は「自己増殖する価値」すなわち、「元手が増えることが資本」である。労働者が自分の賃金以上にタダ働きさせられている。その部分が剰余労働であり、そこでつくられるのが剰余価値である。

第4章では、もうけは商品の売買、すなわち流通過程からは生まれないことをポイントに展開している。もうけは生産過程からというのが第5章である。

「資本の一般的定式」とは、資本とは何かの一般論である。

（16世紀の世界商業）

p.255　商品流通は資本の出発点である。商品生産、および発達した商品流通は——商業——は、資本が成立する歴史的諸前提をなす。世界商業および世界市場は、16世紀に資本の近代的生活史を開く。

コロンブスのアメリカ発見－1492年

10月12日

p.256　この過程の最後の産物として、貨幣を見いだす。

ここまで－商品流通から一般等価物

としての貨幣が生まれた。最後の産物

だった貨幣が、こんどは資本の最初の

現象形態になるといっている。

（商人資本、高利貸資本）

p.256　歴史的には、資本は、どこでも最初はまず貨幣の形態で貨幣財産すなわち商人資本および高利資本として、土地所有に相対する。

金もうけの3つの方法

❶物の売り買い。商業資本。資本主義

以前の不等価交換の場合は、売買から

ももうけは生じる。

❷他人にお金を貸してもうける。高利

貸資本。利子生み資本。

❸「領主のいない土地はない」→特定

の人間関係のもとづく社会ではなく、

貨幣を媒介として、世の中が動いてい

く社会。

（Ｗ－Ｇ－ＷとＧ－Ｗ－Ｇ）

貨幣としての貨幣と資本としての貨

幣はどこがちがうのか。

ｐ.256 貨幣としての貨幣と資本としての貨幣とは、さしあたり、それらの流通形態の相違によってのみ区別される。

貨幣としての貨幣　Ｗ－Ｇ－Ｗ

商品の仲立ちをするあるいは流通の

手段。

商品の貨幣への再転化：一度お金に

なって,そのお金がまた商品に再転化、

買うために売るといっている。

資本としての貨幣　Ｇ－Ｗ－Ｇ

「買うために売る」が「売るために買

う」。つまり。貨幣が商品になって、さ

らに商品が貨幣になる。はじめと終わ

りがＧとＧである。

ｐ.258　まず、両方の形態に共通なものを見てみよう。

両方とも二つの相対する局面、Ｗ－Ｇ

かＧ－Ｗという極面をもっている。人物

としては、たぶん3人がそこにいる。

Ｗ－Ｇ－Ｗ　お金を出して、まず買って、

その商品を売るという、仲立ちをする人

がいる。

ｐ.258　どちらの場合にも、この統一は3人の契約当事者の登場によって媒介されていて、そのうちの1人は売るだけであり、もう1人は買うだけであるが、第3の人は交互に買ったり売ったりする。

ｐ.258　第1の形態では貨幣が、第2の形態では逆に商品が、全過程を媒介する。

Ｗ－Ｇ－Ｗの最後は商品だが、最初の

商品とはちがう。同じものを取り替え

あるバカはいない。取り替える物が変

わるが、それは商品の使用価値が変わ

るということ。上着と時計を取り替え

る。仲立ちとして途中に貨幣がはいる

ということである。

（大きくなって帰ってくるのが資本）

Ｇ－Ｗ－Ｇ　資本の流通の場合、最終

的にお金になる。お金を手放して、また、

お金になって戻ってくる。

ｐ.259「ずるい下心」…。それだから、貨幣は前貸しされるにすぎない。

前貸し：帰ってくるのを期待している。

貸しているのと同じという意味。

最初と最後が商品の場合→使用価値

が違う。

貨幣の場合→ものは同じだが、大きさ

が違う。

ｐ.259　形態Ｗ－Ｇ－Ｗでは、同じ貨幣片が2度その場所を換える。

まず、商品をもっている人がいる。そ

の商品を売る。売った人はお金を手に

入れる。そのお金で別な商品を買う。お

金は別の人のところへ行く。すなわち、

2回場所がかわる。Ｇ－Ｗ－Ｇの方は、

その逆であり、2度場所を換えるのは、

貨幣ではなく商品の方である。つまり、

お金がまずあって、商品を買う。その商

品を売るのだから、商品の場所が変わ

る、その違いである。

（お金は流れる）

ｐ.260　操作が失敗したか、または過程が中断されてまだ完了していないか‥。

お金を使うということは、お金を食べ

たり、着たりはしないので、次の購買、

販売につながらないと意味がない。お

金を使うということは、次のＧ－Ｗ－

Ｇが始まることを意味する。

（流通の目的の違い）

Ｗ－Ｇ－Ｗの流れの最終目的は使用

価値である。消費欲求の充足。使用価値

がこの循環の最終目的である。

これにたいして

p.260　循環Ｇ－Ｗ－Ｇは、ある一つの商品の極から出発して別の一商品の極で終結する。

貨幣から出発して貨幣に戻ってくる。

使用価値ではなく、交換価値そのもの

である。貨幣という形で現れている交

換価値そのものが欲しいからやってい

る。

ｐ.261単純な商品流通においては、両極が同じ経済的形態をもつ。それらはどちらも商品である。それらはまた、同じ大きさの価値をもつ商品である。しかし、それらは、質的に異なる使用価値、たとえば穀物と衣服である。

コメを売って、そのお金で着物を買う

Ｇ－Ｗ－Ｇの場合はお金からなる出発してお金に戻る。だから質的に異なる使用価値ではない。質的ではなく、量的に違わないといけない。

Ｇ－Ｗ－Ｇ´　Ｇ´＝△Ｇ

(剰余価値)

ｐ.262　この増加分、または最初の価値を超える超過分を私は、剰余価値と名づける。

　貨幣の資本への転化というのは、貨幣の形が変わるものではない。見たところ同じだが、役割が変わるのである。貨幣の使い道がかわる。もうかるように使ったときには、お金は資本になる。むずかしく、資本への転化と言っている。

（商業とばくち）

　注には商業は「ばくち」が書いてある。

（タンス預金）

p.264　蓄蔵貨幣に石化して、最後の審判の日まで蓄えられ続けてもびた一文も増えはしない。

p.264　単純な商品流通――購買のための販売――は、流通の外にある究極目的、すなわち使用価値の取得、諸欲求の充足のための手段として役立つ。これに反して、資本としての貨幣の流通は自己目的である。

動かすことが自己目的となる。

p.264　価値の増殖は、この絶えず更新される運動の内部にのみ存在するからである。

　絶えず運動していないと増えない。資

本の運動には際限がない。

（貨殖術と家政術）

アリストレレスの貨殖術

（蓄蔵でなく投資を）

p.266　この運動の意識的な担い手として、貨幣所有者は。資本家になる。……彼のポケットは、貨幣の出発点であり、気着点である

　使用価値を目的としていない。お金を増やすというのが資本の目的であり、したがって

p.266　この絶対的な致富衝動

　金をもうけたい、もうけたいということ。

p.266　この情熱的な追求は、

　資本家でも貨幣蓄蔵者でも共通だ。違うところは、お金をしまい込むのではなく、‥‥。

p.267　資本家は合理的な貨幣蓄蔵者である。

資本家は、お金を前貸し投資するこ

とによって、もうける。

p.268　自己自身を増殖するのである

まるでオカルト、つまり、魔法のよう

に増えていく

（資本は貨幣形態をとる）

p.269　少なくとも金の卵を

グルグル回っている間に増えてくれ

るのは貨幣だけである。価値が増える。

そのためには一つの自立的形態が必要

であるが、そうした形態はただ貨幣と

いう形のみで現れてくる。

p.269　それゆえ、貨幣はあらゆる価値増殖過程の出発点と終着点をなす。

商品交換を考察してきて、最後は貨幣

というところで第1分冊が終わった。

今度は貨幣から始まるというのは、資

本は貨幣という形をとらないと、資本

として機能しないと言っている。

p.269　価値二つの形態をもつからである。

商品形態と貨幣形態であるが、資本は

貨幣という形をとらなければ、増えて

いかない。

P.269　資本家の知っているように、すべての商品は、いかにみすぼらしく見えようとも、またいかに嫌な臭いがしようとも、神かけてまぎれもなく貨幣であり、内面的な割礼を受けたユダヤ人であり、しかもそのうえ、貨幣より多くの貨幣にするための奇跡的手段である。

心に割礼を受けたユダヤ人が本当の

ユダヤ人だ。「ほんもの」との意味。資

本家から見れば商品は貨幣に見える。

p.270　父なる神としての自己を、子なる神としての自己自身から区別するのであるが、父も子もともに同じ年齢である、しかも実ただ一個の人格でしかない。

キリスト教では、イエスは神の子であ

るが父と子は一心同体であると言う。

両者の区別がなくなるといっている。

（生産過程も流通の一部）

p.271　Ｇ－Ｗ－Ｇ´は、直接に流通部門に現れる資本の一般的定式である。

商業資本だけの話ではない。産業資本

の場合のＷとは、労働力という商品を

買うこと。

「超約『資本論』」（ｐ.110）的場昭弘による「第1節　資本の一般的定式」の読解

「一般に使われている貨幣」と「資本として使われている貨幣」の違いは、まずその流通の仕方にある。

流通形態としては、Ｗ（商品）―Ｇ（貨幣）―Ｗがある。

これと違うものとしてＧ－Ｗ－Ｇがあるが、理論としてはあっても現実にはなりたたない。買って、売って、結局同じ額のお金を得ることは現実社会ではない。しかし、資本としての貨幣はＧ－Ｗ－Ｇをやっている。この目的は戻ってくる貨幣の量にある。

貨幣は貨幣を増やす——価値増殖

一般定式はＧ－Ｗ－Ｇ´ということになる。

「Ｇ´」は「Ｇ」に比べて「△Ｇ」だけ増えたという意味である。「△Ｇ」を剰余価値となづけた。最初に投下された以上の値のことである。

最初に貸し付けられた価値は、流通する中でその価値を維持するだけでなく、その価値を大きくし、剰余価値を付け加える。つまり、価値増殖するのである。そしてこの運動が、この価値を資本に転化するのである。

貨幣から始まる循環である資本は、つねに価値増殖を目的とする。

これとは逆に、資本としての貨幣の流通は自己目的である。その理由は、価値の増殖はただ絶えず更新されている運動の中にのみ存在するからである。だから、資本の運動は無制限である。

貨幣の価値増殖を求める資本家

貨幣のもつ無限の価値増殖の力を見てとっている。この運動を展開する資本家はこの増殖運動を促進する人格化された資本として機能する。貨幣をただ死蔵する蓄蔵者が気の狂った資本家であるとすれば、利殖欲は合理的な貨幣蓄蔵者であるとする。。

資本家は次のことを知っている。つまり、すべての商品は、どんな粗末な物であろうと、あるいはどんな臭いがあろうとも、信仰と真理の点から見てそれが貨幣であり、心の中で割礼を受けたユダヤ人であり、なおかつ貨幣によってより多くの貨幣をつくるための軌跡的手段であることを。